

# テト攻勢第一波と第二波間に出されたホー・チ・ミンから レ・ズアン宛の手紙についての内容分析 ーテト攻勢第二波発動に関する試論ー

福田 忠弘

はじめに

1968年の旧正月（テト）に、南ベトナム解放民族戦線（以下、解放戦線）を中心とする解放勢力<sup>1</sup>によって行われた当時のベトナム共和国（いわゆる南ベトナム<sup>2</sup>）の首都サイゴンをはじめとする諸都市への一斉攻撃、いわゆるテト攻勢は、ベトナム戦争<sup>3</sup>における分水嶺となる事件であった。1964年8月に発生したいわゆるトンキン湾事件以降、アメリカは南ベトナムに本格的に介入すると同時に、北ベトナムへの報復爆撃（いわゆる北爆）も開始した。65年中に派遣されたアメリカ軍の数は18万人を超え、翌66年には48万人に膨れあがり、最大時には54万人にも達した。アメリカの本格介入に直面したベトナム労働党（現在のベトナム共産党）<sup>4</sup>は、1967年夏頃から南ベトナムにおけるアメリカの戦略は行き詰まりを見せていると判断し、1968年1月に行われた第14回中央委員会議で、都市に対する軍事的な総攻撃と都市住民の総蜂起を結合した一大作戦を執行することを決定した<sup>5</sup>。1月31日未明から各地で攻撃が開始され、サイゴン市内では解放勢力がアメリカ大使館を数時間にわたって占拠し、その様子が世界中に報道された。さらに、南ベトナム政府警察長官のグエン・ゴック・ロアン（Nguyễn Ngọc Loan）が解放戦線のメンバーを路上で射殺するシーンが全世界に配信され、アメリカ国内世論はもとより世界中に衝撃を与えた<sup>6</sup>。中部の都市フエでは約1か月にわたって戦闘が継続された。この結果、アメリカでは大規模なベトナム反戦運動が巻き起こり、当時のジョンソン（Lyndon B. Johnson）大統領は、68年3月、北爆の部分停止と大統領選挙の不出馬を表明した<sup>7</sup>。さらに同年5月には、パリでのアメリカと北ベトナムの第一回会談が開かれ、ベトナム戦争は新しい局面に入っていくことになった。

<sup>1</sup> 当時、南ベトナムでは南ベトナム解放民族戦線、南部中央局、南ベトナム解放軍、北ベトナムから輸送の任務を担っている559部隊などが活動していたが、本論文ではそれらを総称する際に、解放勢力という言葉を使用する。

<sup>2</sup> ベトナム語では、miền Nam と表記される。本来、ベトナム南部、ベトナム南方という日本語訳を採用すべきだが、すでに南ベトナムという呼称が一般的になっていると考え、本論文では南ベトナムと表記する。同様に、miền Bắc も北ベトナムと表記する。

<sup>3</sup> ベトナムではベトナム戦争ではなく、抗米救国戦争（kháng chiến chống Mỹ, cứu quốc）という呼称が用いられる。本論文では、抗米救国戦争とベトナム戦争を適宜使い分ける。

<sup>4</sup> 抗米救国戦争当時のことに言及する際には、当時の名称であるベトナム労働党を、現在のことについて説明する場合は、現在の名称であるベトナム共産党を使用する。

<sup>5</sup> Đảng cộng sản Việt Nam, *Văn kiện Đảng, toàn tập, tập 29, 1968* (Nhà xuất bản(NXB) chính trị quốc gia, 2004) pp.41-68. 以後、この党文献については、VKD と略記し、それぞれの巻号を付記する。例えば、『党文献』の29巻の場合は、VKD:29 と表記する。

<sup>6</sup> グエン・ゴック・ロアンが解放戦線のメンバーだったグエン・ヴァン・レム（Nguyễn Văn Lém）を射殺したシーンは、エドワード・アダムス（Edward T. Adams）が撮影しピューリッツァー賞を受賞している。

<sup>7</sup> この点については、多くの書籍があるが、以下のものなどを参考のこと。George C. Herring, *LBJ and Vietnam: a different kind of war* (University of Texas Press, 1994); Walter Lafeber, *The deadly bet: LBJ, Vietnam, and the 1968 election* (Rowman & Littlefield publishers, 2005); Looyd C. Garner and Ted Gittinger eds., *The search for peace in Vietnam, 1964-1968* (Texas A&M University Press, 2004).

しかしテト攻勢とは、1968年1月に行われた解放勢力による一連の攻撃（第一波）のみを指すのではない。同年5月に第二波、同年8月に第三波が発動されて、この三波を合わせてテト攻勢と呼ぶ必要がある<sup>8</sup>。テト攻勢は政治的には成功したが、軍事的には失敗したと言われている。特に第二波、第三波と無理な攻撃を継続したために、解放戦線側は多くの死傷者を出して、立て直しを図るために数年かかったと評価されている。ベトナム共産党の機関誌『ニャンザン』の元副編集長を務め、後にフランスに亡命したブイ・ティン (Bui Tin: 筆名がティン・ティン) は、その回想録のなかでテト攻勢について以下のように述べている。

1988年の始め、テト攻勢20周年記念に際して、国防相は1968年の攻勢について、総括的な意義のある集会を開いた。外務省の代表が出席して、あの勝利が外交闘争の面で及ぼした影響について語った。発表された数字を見ると、犠牲は実に膨大だった。最初の段階（1968年1月）では多くなかったが、第二段階（1968年5月）になると増えており、第三段階（1968年9月）ではさらに増えている。急激で猛烈な平定作戦によって、1969年から70年初めまでに、さらに犠牲者が続出した。数十年かけて作られた基礎単位の武装勢力、ゲリラ部隊、地方の正規軍は、1968年中にほとんど残らず暴き出され、重要な地域から一掃されてしまった。

このダメージから少しずつ回復するようになったのは、1970年の半ばになってからだった。誰もが認めるように、1968年半ばから70年初めまでは、解放勢力が劣勢に立たされた時期で、その後徐々に基盤を立て直すために、全勢力の保全に回らねばならず、戦争中の他の時期と比べて最も被害が大きかった時期である<sup>9</sup>。

本論文では、テト攻勢第一波終了後、なぜ第二波が発動されたのかについて焦点をあてる。その際に主要な分析対象とするのは、1968年3月10日に、中国にいるホー・チ・ミン (Hồ Chí Minh) から、当時第一書記を務めていたレ・ズアン (Lê Duẩn) に出された手紙（以下、「ホーの手紙」と略す）である。後述するように、「ホーの手紙」はテト攻勢の第一波が終了し第二波が始まる前に出され、その主な内容は、ホー・チ・ミンが南ベトナムを訪問し、解放勢力を鼓舞したいという希望を表明するものになっていた。これまで政治局や中央委員会がどのような決議を出したのか、どのような総括をしたのかについては、現在刊行されている党文献などを通して一部明らかになっているが、ベトナム労働党の上層部、ホー・チ・ミンやレ・ズアン、後にパリ会談に参加するレ・ドゥック・ト (Lê Đức Thọ) がどのような認識を持っていたのかは明らかではない<sup>10</sup>。

<sup>8</sup> 本論文において、テト攻勢とは第一波から第三波のもの総称を意味し、それぞれの攻撃を指す場合には、テト攻勢第一波、もしくは第一波などと表記する。

<sup>9</sup> タイン・ティン (中川明子訳) 『ベトナム革命の素顔』(めこん、2002年) 232頁。

<sup>10</sup> 前述した、ブイ・ティンの回想録のなかで、1984年に書記長レ・ズアンに対して二人の作家がテト攻勢時で膨大な犠牲者について質問するシーンがある。そこで、二人の作家がテト攻勢時に膨大な犠牲者について質問すると、レ・ズアンは激怒して次のように発言したとある。「君たちは何もわかっていない！ 軍の中堅幹部がそんなことを言って良いと思うのかね？ 1968年の攻勢は大きな勝利だった。アメリカに手を引かせる決定的なきっかけを作ったんだ。多くの犠牲も妥当なもので、必要なものだったんだ。1968年の攻勢で勝たなければ1975年4月30日の完全勝利も不可能だった。戦争をするなら犠牲にも耐えなければならん。犠牲を怖がっていたら国を失うのだ！ そんなこともわからないで何を書けるんだ！ 安逸と保身を求めているは、革命を成し遂げることはできない。いやしくも軍人や党員がそんな間違った考えを起こしてはいかんのだ！」。幹部の中でも、テト攻勢についてのマイナ

本稿では、「ホーの手紙」の内容分析とともに、当時の中央委員会決議文などを分析することにより、以下の諸点についての仮説を提示することが可能であると考えている。(1) テト攻勢第二波はどのような目的を持って行われたものなのか、(2) テト攻勢第二波、第三波と攻撃を継続したが、これらはベトナム労働党執行部の情勢判断の誤りによるものだったのか。それとも何らかの目的を達成するために意図的・計画的に行われたものだったのか、(3) 第13回中央委員会議において、軍事闘争、政治闘争、外交闘争を結合して行う「三面闘争路線」が提示されるが、テト攻勢時の外交目標はどのようなものだったのか、についてである。断っておかなければならないのは、本論文の目的がテト攻勢の全体像を明らかにするものではないということである。第3節で言及するが、本論文で分析対象とする「ホーの手紙」を取り上げている先行研究はほとんど存在しない。そこで、「ホーの手紙」を分析対象に含めることによって提示可能な仮説を導きだし、検討することが本論文の主要な目的を形成する。

第1節においては、アメリカの本格介入に直面したベトナム労働党が、テト攻勢までどのような方針をもっていたのかについて概観する。第2節では、テト攻勢においてどのような軍事的目標が設定されていたのかについて言及する。第3節では、本論文が主要な分析対象とする「ホーの手紙」の公開状況とその形態について焦点をあてる。現在、5つの形態で「ホーの手紙」が公開されている。第4節では、それら5つの形態で公開されている「ホーの手紙」の内容について比較分析を行う。第5節では、「ホーの手紙」の内容について考察を加えて、五つの仮説を提示し検討を加える。

## 1 アメリカの本格介入からテト攻勢までのベトナム労働党の方針

1964年8月、いわゆるトンキン湾事件が発生し、アメリカ議会ではジョンソン大統領にベトナム戦争に関する全権を委任する決議（いわゆるトンキン湾決議）が可決された。これに伴って、翌65年3月には北ベトナムを爆撃するいわゆる北爆が開始された。

こうした事態を受けて、ベトナム労働党は65年3月25日から27日まで、第11回中央委員会議を開催した。その決議文を見ると、今後アメリカとその同盟国が多くの軍隊を南ベトナムに派遣し、さらに北爆を恒常化するであろうと認識していたことが分かる。この情勢認識に依拠して、以下の点を共通の任務とすることが決議された。(1) 南北ベトナムの力を結集して、比較的短時間に南ベトナムにおけるアメリカの特殊戦争に勝利を収め、同時にアメリカが自らの軍隊を派遣して行う局地戦争の準備を行うこと、(2) 北ベトナムの経済と国防を強化して、アメリカの北爆に抵抗すると同時に、南ベトナムでのより熾烈な戦争に備え、北ベトナムから南ベトナムへの支援を強化するとともに、北ベトナムにも拡大されるかもしれない局地戦争に備えること、(3) ラオスでの革命を支援すること<sup>11</sup>。つまりアメリカの本格介入に対して、南北ベトナムおよびラオスにおいて、軍事闘争と政治闘争を主要な手段として用いることが決定されたと言える。

ベトナム労働党中央委員会議で上記の点が決定された一方、65年4月に行われた第二回

ス面については、簡単に話ができなかったことが推定できる。タイン・ティン、前掲書、230-231頁。

<sup>11</sup> 第11回中央委員会議の決議については、VKD-26, pp.102-118を参照のこと。また、同決議は、*Một số văn kiện của Đảng về chống Mỹ, cứu nước, tập 1, 1954-1965* (NXB Sự thật, 1985) pp.211-227 (以下、この文献はMSVKDMと略す)にも収録されている。

国会においてファン・ヴァン・ドン(Phạm Văn Đồng)は、ベトナム民主共和国の4つの立場(以下、「四項目」と略す)を表明した。この「四項目」を要約すると以下の通りとなる。

(1) ジュネーヴ協定を遵守して南ベトナムからのアメリカの軍隊、軍事顧問、各種の武器を撤退させ、南ベトナムへの侵略を停止すると同時に、北ベトナムへの戦争行為を中止し、ベトナム民主共和国の主権を侵す行為をやめる。(2) ジュネーヴ協定を遵守し、南北ベトナムとも外国との軍事同盟締結、外国の軍事基地設置を禁止し、外国軍隊と軍事顧問を排除する。(3) 南ベトナムについては、南ベトナム解放民族戦線の綱領に基づいて南ベトナム人民自身に解決させ、外国の干渉を受けない。(4) 南北ベトナムの平和的統一については、南北ベトナム人民自らが決し、外国の干渉を受けない<sup>12</sup>。この「四項目」は、アメリカとの外交交渉における原則となっていく<sup>13</sup>。

1965年12月27日に、ベトナム労働党第12回中央委員会議が開催され、ベトナム労働党中央は、アメリカが介入の度合いを深めていることを確認するとともに、北ベトナムを守り、南ベトナムを解放するために軍事闘争と政治闘争を行っていくという第11回中央委員会議の路線を継続していくことを決議した。ただ、アメリカへの抵抗が長期にわたること、そして頼るべきはまず自分たちの力であることが強調されたうえで、外交努力としては社会主義陣営からの支持と援助を勝ち取ることが目的であると決議された<sup>14</sup>。第12回中央委員会議では、外交といえば社会主義陣営からの援助を多く得ることを意味しており、アメリカとの交渉は想定されていなかったことは注意すべき点である。

アメリカとの交渉が中央委員会の決議文に登場するのは、第12回中央委員会議開催から約1年後の1967年1月27日に行われた、第13回中央委員会議からである。この会議の決議文において、アメリカとの外交交渉の原則が言及され、軍事、政治とともに外交の三つの線戦で闘争を行うこと(đấu tranh trên ba mặt trận quân sự - chính trị - ngoại giao)が決定された。いわゆる「三面闘争路線」の開始である<sup>15</sup>。しかし問題は、軍事闘争、政治闘争、外

<sup>12</sup> *Ibid.*, p. 236.

<sup>13</sup> この「四項目」について言及している先行研究は、遠藤聡「ベトナム労働党の外交闘争と南ベトナム解放民族戦線-パリ「四者」会談実現の意義-」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』(第43輯・第4分冊、1998年)4-8頁を参照のこと。

<sup>14</sup> 第12回中央委員会議の決議については、VKD-26, pp.622-651を参照のこと。また、これまで抗米救国戦争についてのベトナム労働党の決議に言及する際の必須資料の一つでもあった、MSVKDMとVKD-26を比較してみると興味深いことが明らかになる。抗米救国戦争遂行に関する中央委員会の決議文は、たいてい、「情勢」、「共通の任務」、「具体的な任務」という項目立てがされる。VKD-26では、「具体的な任務」の項目中、南ベトナムについての具体的な任務が空白になっていたことが明らかになった。なぜ空白になっていたのかは明らかではないが、1957年頃、ベトナム労働党中央は南ベトナムの情勢認識を誤り、南ベトナムの党組織に壊滅的な被害を与えたことがあった。そうしたことから、第12回中央委員会の決議文でも、アメリカ軍が介入を深めるなか、敢えて「具体的な任務」には言及しなかったのではないかと筆者は推測しているが、この点については今後の研究課題としたい。「具体的な任務」が空白になっている箇所の比較については、VKD-26, p.643とMSVKDM, p.26を参照のこと。社会主義ベトナムでは、資料が公開された時によって、同じタイトルの文書であっても内容が修正、削除、改ざんされる場合があるので、複数の資料を比較することが大切である。例えば、抗米救国戦争についての回顧録(故人)が再版される際にも、その内容に修正、削除、改ざんが行われている。このような例を取り上げたものとして、拙稿「ベトナム共産党による戦史評価の変化-ファン・ヴァン・チャー著作再発行の意義-」『社会学論集』(第8号、2006年)、同「ベトナム南部委員会(1954-61年)についての資料公開とその問題点」『研究年報』(第41号、2009年)などを参照のこと。

<sup>15</sup> この時点で、ベトナム労働党中央が外交による解決がどの程度可能と考えていたかについては、定かではない。第13回中央委員会の決議文でアメリカとの外交方針について言及されたことはこれまでにない路線であるが、あくまでも原則論が貫かれている。しかしベトナムで出版される書籍では、濃淡はあるものの第13回中央委員会は、外交路線が提示された会議として扱われている。そのような例として、*Những sự kiện lịch sử Đảng, tập III, về kháng chiến chống Mỹ, cứu nước, 1954-1975* (NXB thông tin lý luận, 1985) pp. 388-391や、*Ban chỉ đạo tổng kết chiến tranh trực thuộc Bộ chính trị, Chiến tranh cách mạng Việt Nam, 1945-1975, Thắng lợi và bài học* (NXB chính trị quốc gia, 2000) p.158、大学で使

交闘争の関係である。決議文では、「現在の私たちの抗米救国戦争において、南ベトナムにおける軍事闘争と政治闘争は、戦場における勝利を決定する重要な要因であり、外交闘争における勝利の基礎を作り出す。戦場において勝ち取ったものだけを、交渉の席上で獲得することができるのである。当然、戦場における軍事闘争が外交闘争に単純に反映される訳ではないが、彼我の国際情勢においては、外交闘争は積極的かつ主体的で重要な役割を果たすことになる」<sup>16</sup>と、軍事闘争と政治闘争以外に外交闘争を重視する理由を述べている。しかし、決議文の別な箇所では、アメリカの北爆と外交交渉の関係について、「私たちが決して忘れてならないのは、戦場での勝利がすべてを決するということである。したがって、どんな時でも、たとえアメリカ帝国主義が北爆を停止してもしなくても、第12回中央委員会議の決議に従って、私たちは断固として南ベトナムにおける軍事闘争と政治闘争を強く押し進め、北ベトナム防衛のための戦いを推進しなくては行けない」<sup>17</sup>と、軍事闘争と政治闘争を主要な手段とする見解を示している。最終的には外交交渉による解決を目指す、少しでも有利に交渉を進めるために軍事・政治闘争が重視されていたことが分かる。

テト攻勢が最終的に決定されたのは、1968年1月の第14回中央委員会議においてであった。この会議において、軍事闘争と政治闘争を結合させた総攻撃・総蜂起路線が決定された<sup>18</sup>。同時に政治闘争として、南ベトナム解放民族戦線に次ぐ第二の民族戦線を設立する方針が決定されている<sup>19</sup>。この点は、パリ会談開始後の南ベトナム共和国臨時革命政府の樹立への大きな布石となってくる。第14回中央委員会議の決議では、軍事闘争と政治闘争、および外交闘争の関係において、まず外交闘争は総攻撃・総蜂起と結合させ、アメリカを混乱させ、受け身にさせることが目標として掲げられているが、外交に関する具体的な争点に対する交渉方針などは明らかにされていない。

## 2 テト攻勢における三段階の目標

ベトナム戦争終結から約20年後の1994年4月23日に行われた政治局会議では、テト攻勢について次のような欠点を指摘した評価を行っている。それは、「テト攻勢は非常に大きな勝利であり、アメリカの侵略の意図を打ち砕き、戦争の行く末を決定付けたことが特筆すべき点である。しかしその後私たちは方針転換に遅れ、条件が整っていない段階にあって、主観的に各都市への第二派、第三派の攻撃を継続したのは戦争指導に関する誤りであり、味方に多くの損害と困難をもらしてしまった」<sup>20</sup>と結論づけている。自己批判をしていることはこれまでにない傾向と言えるが、漠然とした内容であり、実際にどのような欠点があったのかが明らかではない。

テト攻勢に関して、ベトナム共産党の側からもう少し具体的にマイナス点について指摘しているのは、前述したブイ・ティンである。ブイ・ティンは、亡命後の回想録の中で以

用されるテキストである Lê Mậu Hãn(chủ biên), Trần Bá Đệ, Nguyễn Văn Thư, *Đại cương lịch sử Việt Nam, tập III* (NXB giáo dục, 2002) p.209 がある。

<sup>16</sup> 第13回中央委員会議決議の全文は、VKD-28, pp.171-179 を参照のこと。

<sup>17</sup> *Ibid.*, p.176.

<sup>18</sup> VKD-29, pp.57-59.

<sup>19</sup> *Ibid.*, pp.60-61. 1968年1月21日に政治局は、南ベトナムにいるファム・フン、ヴォー・チー・コン、チャン・ヴァン・クアンあてに秘密電報を送り、「民族民主平和連合」を設立するように指示している。

<sup>20</sup> Bộ quốc phòng viện lịch sử quân sự Việt Nam, *Lịch sử kháng chiến chống Mỹ cứu nước, tập V, tổng tiến công và nổi dậy năm 1968* (NXB Chính trị quốc gia, 2001), pp. 323-324. この資料は、LSKCMN と略す。

下のような記述をしている。

1968年中の各戦役の指揮全体を通して、次のような弱点と誤りがあったとされている。

-各段階の攻撃拠点と、一度の攻撃の効果を最初から設定せず、年間の計画化も不十分だった。したがって、後になるほど戦闘の主導権を喪失した。

-初期の劇的な勝利の後、本来なら、長期的な活動に備えて全勢力の保全に転じるべきだった。それを、状況が覆るかも知れないと主観的に考え、攻撃の手を緩めなかった。その時、敵はすでに対応策を立てており、予想外のことが起こるはずはなかった。そのために、後の二段階（5月と9月）では損害を被ったのだ。「攻撃を続けよ、さらに攻撃を加えよ」と命じたために、いっそう重大な損失を被ったのである。1968年、69年、そして70年初めの膨大な損失は、非常に大きな困難をひき起こした。1970年の半ばになってやっと立ち直り、71年のラオス南部の戦いを経て、72年は新たに、クアン・チ [クアン・チ省] とコン・トゥム [コン・トゥム省] - プレイ・ク [ザ・ライ省] およびロック・ニン [ビン・フォック省] の三カ所に攻勢をかけることができた。

-戦場では、「もう十分な勝利をおさめ、世論とアメリカ政府にも十分影響を与えたのだから、勢力を保全し、戦いながら撤退して、新たに体制を強化すべきだ」という意見がでたこともあった。にもかかわらず、指導部は「もっと進撃せよ、さらに進撃せよ」とせき立てるのをやめなかった。

-主観的に進撃することだけしか考えなかったため、進撃に出る際に、二度と戻らぬ決意で、すべての拠点を破壊し尽くした。前進するだけで後退を考えていなかったため、拠点に戻って来た時に、思いがけない困難に直面した。すべてを最初からやり直さなければならなかった。主観に陥ったために、非常に大きな付けが回ってきたのである<sup>21</sup>。

1968年1月の第14回中央委員会議で、軍事闘争と政治闘争を結合させた総攻撃・総蜂起路線が決定されたが、具体的にどのようなことが想定されていたのか。ベトナム労働党中央もテト攻勢について大胆な計画をしていたが、必ずしも確実に勝利を収めることだけが考えられていた訳ではなく、北ベトナムへの戦争拡大の懸念についても考慮されていた。1967年10月20日から24日まで行われた政治局会議では、三つのシナリオが想定されていた。この会議にはレ・ズアンとヴォー・グエン・ザップ(Võ Nguyễn Giáp)は健康上の理由から欠席をしたため、チュオン・チン(Trương Chinh)が会議を主宰し、ファム・ヴァン・ドン、グエン・ズイ・チン(Nguyễn Duy Trinh)、レー・タイン・ギ(Lê Thanh Nghi)、ヴァン・ティエン・ズン(Văn Tiên Dũng)、チャン・クオック・ホアン(Trần Quốc Hoàn)、レ・ドウック・トの政治局員の他に、中央軍事委員会のトー・ヒウ(Tô Hữu)、レ・ヴァン・ルオン(Lê Văn Lương)、ソン・ハオ(Song Hào)、グエン・ヴァン・ヴィン(Nguyễn Văn Vịnh)、チャン・クイ・ハーイ(Trần Quý Hai)らも参加した。政治局会議では、可能であれば同じ日の同じ時

<sup>21</sup> タイン・ティン、前掲書、232-234頁。

間において、重点地点であるダナン、サイゴンにおいて総攻撃、総蜂起を行い、各都市の政治面、軍事面において機能麻痺に陥らせ、アメリカとサイゴン政権に敗北を承認させることを第一とし、グエン・ヴァン・ティエウ (Nguyễn Văn Thiệu)、グエン・カオ・キ (Nguyễn Cao Kỳ)、ウェストモーランド (William C. Westmoreland) らを捕虜にすることができれば最良であるとした。そこで政治局は以下の三つのシナリオを掲げた。①最高の勝利として、南ベトナムにおいて完全勝利し北ベトナムを保持する。②次善の目標として、基本的に勝利を収めるが、撤退した敵が一部の地点に反撃を加え戦争が継続する。③三番目に、例えば50%程度しか勝利を収めることができない<sup>22</sup>。こうした点に留意して、軍事的な計画が立案されることになった。

10月の政治局会議に続いて、12月初頭にも政治局が開催された。この政治局会議にはホー・チ・ミンも参加し、レ・ズアンが会議を主宰した。第14回中央委員会議の方針がこの会議において最終的に決定されたと考えられる。会議では、10月政治局の決議、南ベトナムにおける情勢報告を総合的に判断しながら、総攻撃、総蜂起が発展する三つの可能性について以下のように決定された。

第一に、我が方は重要拠点において大勝利を納め、さらに各大都市において蜂起が成功し、アメリカの侵略の意図を打ち砕き、そしてアメリカが私たちの目標と要求に沿って戦争終結の外交交渉を始めることを承認しなければならなくなる。

第二に、我が方が多くの地点において重要な勝利を収めるが、敵も軍事力を保持し重要な基地を確保しながらさらなる部隊を介入させ、重要拠点や大都市（特にサイゴン）への反攻を行い、我が方との戦争が継続する。

第三に、アメリカは軍事力を増強し、北ベトナムとラオス、カンボジアにも戦線を拡大し、敵は劣勢を挽回するために局地戦争を企て、我が方がそれに対処しなければならなくなる [下線部筆者]<sup>23</sup>。

第一と第二の可能性については、南ベトナムの首都サイゴンにおける総攻撃、総蜂起が成功することを前提としているものであり、サイゴンへの反攻に備えることに言及されている。ここで注目する点は、下線を付した箇所が政治局会議では総攻撃、総蜂起の結果、アメリカとの外交交渉を開始することを最良の結果としていることである。第三の可能性は、ベトナム労働党にとって最悪のシナリオと言えるであろう。南ベトナムの戦争が北ベトナム、さらにラオス、カンボジアへと拡大することは、ベトナム労働党にとってはどうしても避けたい最悪の事態であった。ここで問題なのは、最悪のシナリオが想定されているながら、ブイ・ティンが指摘したように、なぜ第二派、第三派と攻撃をくり返すことになったのかという点である。第二波は、ベトナム労働党指導部による主観的な情勢判断に基づいて行われた誤った指導だったのか。それとも多大な犠牲がでることを覚悟の上で、何らかの他の要因によって発動されたものだったのか。この点がここでの主要な論点を形成する。以下で検討する「ホーの手紙」は、この問題点を考察するうえで一つの重要な手掛かりを与えてくれていると考えている。

<sup>22</sup> LSKCMN, p. 35.

<sup>23</sup> LSKCMN, pp. 38-39.

### 3 ホー・チ・ミンの手紙の公開状況とその形態について

「はじめに」でも少し言及したが、本論文で検討する手紙は、1968年3月10日付、中国で病氣療養中のホー・チ・ミンからレ・ズアンに宛ててだされたホー・チ・ミン直筆のものである。現在、この「ホーの手紙」は以下の5つの形態のものを確認することができる。

第一に、ベトナムで刊行されている『ホー・チ・ミン全集』に掲載されているものである<sup>24</sup>。全10巻からなる同全集が出版されたのは1980年代で、「ホーの手紙」が所収されている第10巻は1989年に出版されている(以下、『全集初版』と略す)。この『全集初版』では、ホー・チ・ミンの手紙、発言、新聞や雑誌、書籍に掲載された記事などがまとめられている。この『全集初版』に所収されているのは直筆の「ホーの手紙」をタイプで打ち直したものである。その後、1990年代になって、同書の第二版全12巻が出版されている(以下、『全集第二版』と略す)<sup>25</sup>。「ホーの手紙」については、『全集初版』と『全集第二版』でその内容に違いはない。この『全集初版』に収録されている手紙について言及しているのは、古田元夫による研究である。古田は、この手紙の中の一部を引用して、健康を崩してもなおホー・チ・ミンが南ベトナムに対して強い思いを持っていたと紹介している<sup>26</sup>。

第二に、ベトナムで刊行されている『ホー・チ・ミン略伝』(以下、『略伝』と略記する)に所収されているものである。『略伝』は全10巻からなり、1993年から順次刊行された。「ホーの手紙」は第10巻に収録されている<sup>27</sup>。この『略伝』も2003年から増補改訂版が出版され、本論文執筆段階で第9巻(2008年)まで出版されているが、本論文で対象とするテト攻勢に関する資料が含まれることが予想される第10巻は今のところ出版されていない。この『略伝』には、『全集初版』と『全集第二版』に収められている「ホーの手紙」の一部が抜粋されている。『略伝』を使用して「ホーの手紙」について分析しているのは、William J. Duikerである。Duikerは1月31日のテト攻勢第一派のあと、南ベトナムに入る途上北京に立ち寄ったレ・ドゥック・トからテト攻勢が成功したとの報告を受けて、ホー・チ・ミンと一緒に南ベトナムに入ることを希望したことを紹介しながら、「ホーの手紙」についても言及している<sup>28</sup>。

<sup>24</sup> *Hồ Chí Minh Toàn Tập, tập 10* (NXB Sự thật, 1989) pp. 635-636.

<sup>25</sup> *Hồ Chí Minh Toàn Tập, tập 12* (NXB Sự thật, 1996) pp. 337-338.

<sup>26</sup> 「このホー・チ・ミンの南への思いは、健康が衰えてからも変わることがなかった。一九六八年三月テト攻勢の直後に、ホーは静養先の中国からレ・ズアン第一書記に手紙を送り、「去年のクリスマスに君は、完全な勝利を勝ち

とったあと、おじさん(ホーのこと-引用者)が南に行くようにと勧めたこと、おじさんも大いに賛成したことを思い出しています。しかし、ここで、完全な勝利の『あとで』というところを、『前に』と替えてもらいたいです」として、南を訪れる機会が与えられることを強く希望している。このホーの願望はかなえられなかったが、アメリカに挑戦してでも南北の統一を達成するというホーの思いが、ベトナムの抗米救国闘争を支えたことは疑いがないだろう」と言及している。同書中、引用元が明示されてはいるが、巻末の参考文献などを参照すると『全集初版』のものを使用していると推測できる。ベトナム古田元夫『ホー・チ・ミン』(岩波書店、1996年)163頁。

<sup>27</sup> *Viện nghiên cứu chủ nghĩa Mác - Lê Nin và tư tưởng Hồ Chí Minh, Hồ Chí Minh Biên niên tiểu sử, tập 10* (NXB Chính trị quốc gia, 1993-96) pp. 156-157. 以下、この文献はHCMBNTSと略す。

<sup>28</sup> Duikerは以下のように言及している。「(テト攻勢後の対応について-筆者注) ホワイトハウスがそのジレンマについて検討しているところ、政治局のメンバーであるレ・ドゥック・トが、テト攻勢の結果について報告するために依然として北京に滞在しているホーを訪問した。ト(こののちすぐにパリ会談におけるハノイの首席代表に選出される)は後に、テト攻勢が限定的な成功しかもたらさなかったと認めることになるが、この時は疑いもなくホーに対してテト攻勢が大勝利であったと報告し、ホーは喜んだ。トがホーに、テト攻勢後の情勢を検討するために南ベトナムを訪問することを伝え、ホーはトに同行することを強く望んだ。トは、カンボジアのシハヌークビル港(当時党幹部の多くがこのルートをとった)を通過するためのビザが得られていないので不可能であり、ホーの髭がすぐ正体がばれてしまうと思いとどまらせようと試みた。ホーは、それでは髭を剃ると答えた。それに対してトは、それでは南ベトナムの戦士達がホーと分からないと切り返した。老革命家をなだめるために、トは検討して



第三は、ベトナム南部にある博物館での展示品である。筆者が調査したところ、ホーチミン市にある「ベトナム南部女性博物館 (Bảo tàng Phụ Nữ Nam Bộ)」と、フエにある「ホー・チ・ミン博物館 (Bảo tàng Hồ Chí Minh)」に直筆の「ホーの手紙」のコピーが展示されている。両博物館の「ホーの手紙」の内容は同じものだが、手紙の署名の有無などに違いがある。また、「ベトナム南部女性博物館」の展示物は白黒だが、「ホー・チ・ミン博物館」の展示物はカラーのもので、ホー・チ・ミンが赤のインクを用いて強調していた箇所が分かる。上述した『全集』と『略伝』では、タイプで打ち直されたものが所収されているだけなので、比較の対象として両博物館にある展示物は重要な意味を持つ。

第四に、「南部中央局博物館 (Di tích lịch sử - văn hoá Căn cứ Trung Ương Cục Miền Nam)」についての解説書(ベトナム語と英語が併記されている)である<sup>29</sup>。この博物館は、ベトナムとカンボジア国境近くに拠点をもち、当時ベトナム戦争の指導を行っていた「南部中央局」についての博物館である。この解説書のなかに直筆の「ホーの手紙」(白黒)が掲載されている。ここでの「ホーの手紙」と、フエの「ホー・チ・ミン博物館」のものの内容は全く同じであるが色だけが違う。また「女性博物館」のものと同様だが署名の有無が異なっているだけである。「南部中央局博物館」の資料も重要である。資料に付されている注において、「ホーの手紙」中に暗号名で呼ばれている人物が誰なのかが明らかになるからである。次節でも述べるが、「ホーの手紙」のなかに、「anh Sáu (Mr. 6)」と「anh Bảy (Mr. 7)」についての記述があるが、「南部中央局博物館」の資料によって、「anh Sáu」はレ・ドゥック・トで、「anh Bảy」がファム・フン (Phạm Hùng) であったことが裏付けられる。

この5種類の「ホーの手紙」を検討することが次節の課題である。

#### 4 ホー・チ・ミンの手紙の内容分析

表1は、5つの「ホーの手紙」の内容を比較するために作成したものである。「段落番号」は「ホーの手紙」中の段落を意味し、「文章番号」は各段落の中での文章の順番を意味する。『全集第二版』をもとに、『全集第二版』に掲載されていない内容で、他の資料にその文章があるものについては、丸カッコ「( )」で表示した。『全集第二版』にある文章と比較して、同じ文章が存在するものについては「○」を、同じ文章が存在しない場合には「×」を、同じ内容でも表現が異なっていた場合には「△」を記している。「ホー・チ・ミン博物館」に展示されている「ホーの手紙」中、赤字で書かれている箇所については波線による下線で表した。『全集第二版』についている原注については、表1に原注として表記している。筆者による注は、ベトナム語とそれに対応する日本語訳の箇所に下線を引き、50音順

---

みることを約束した。トが北京を去るとき、ホー・チ・ミンはトを抱きしめた。後にトは知人に、二度と年老いた同士に会うことができないのではないかと恐ろを抱いたと述べている。

ホー・チ・ミンは、自身の健康状態の悪化のために、党幹部らが南ベトナム訪問という希望を拒絶するのではないかと予測していた。ハノイにいるレ・ズアンに対する手紙のなかで、空気が変われば健康が回復すると書いている。さらにホーは、南ベトナム訪問が、目的のために命を捧げようとしている何千という戦士の精神を強化することも説明している。3月19日、ホーは中国の周恩来首相にあてて、彼の希望が承認されるよう支援してくれることを求める手紙も書いている。ハノイでは、この要求は暗黙のうちに棚上げされた。William J. Duiker, *Ho Chi Minh* (Allen & Unwin, New York, 2000) p. 558. ホー・チ・ミンから周恩来への手紙についても、『略伝』に所収されている。この点については、後述する。

<sup>29</sup> Ban quản lý các khu di tích lịch sử cách mạng Miền Nam – Tỉnh Tây Ninh, *Di tích lịch sử - văn hoá Căn cứ Trung Ương Cục Miền Nam* (NXB Văn nghệ, 2006) p. 14.

のカタカナを下付きで付した。

なぜ自筆の「ホーの手紙」のコピーが、かつての南ベトナムに属した地域の博物館で展示されているのかは、今のところはっきりした理由は分かっていない。「トップシークレット」になっていたはずの「ホーの手紙」のコピーがいつ公開され、南ベトナムにもたらされたのかは今のところ不明である。テト攻勢中に南ベトナムにコピーがもたらされたのか、1969年9月のホー・チ・ミン死後に公開されたのか、1975年4月のサイゴン陥落以降に公開されたのかによって、この資料の持つ意味が異なったものになってくるが、この点については今後の課題としたい。

表1 「ホーの手紙」の内容分析

段落番号	文章番号	『全集第二版』に収録されているホー・チ・ミンの手紙 (上段がベトナム語/下段が筆者による日本語訳)	『略伝』	ホー・チ・ミン博物館	南部中央局博物館	女性博物館
0	1	(10.3.68) (1968年3月10日)	△	○	○	○
	2	<u>(Tuyệt đối bí mật)</u> <u>(トップシークレット)</u>	×	○	○	○
1	1	Chú 著 <u>Đuần thân mến,</u> 親愛なるアズアンさんへ	△	○	○	○
2	1	Nhớ lại hồi Nôn năm ngoái, Chú có ý khuyên B. <sup>1)</sup> đi thăm miền Nam <u>Sau</u> ngày ta thắng lợi hoàn toàn, B. rất tán thành. 昨年のクリスマスに、あなたは私に対して、私たちが完全勝利を収めたあと、南ベトナムを訪問することを勧めてくれ、私も大いに賛成したことを思い出しています。	○	○	○	○
	3	Nhưng nay chỉ đổi chữ “sau” thành chữ <u>trước</u> ngày thắng lợi hoàn toàn, tức là đi thăm khi anh em trông <sup>2)</sup> <u>đang</u> chuẩn bị <u>ở</u> <u>màn</u> thứ ba. しかし、ここで完全勝利の「あとで」というところを、「 <u>まえに</u> 」と変更してもらいたいのです。つまり南の人々が <u>第三幕開始の準備をしている時に訪問する</u> ということです。	△	○	○	○
4	2	Đi thăm đúng lúc đó mới có tác dụng khuyến khích thêm anh em. 適切な時期に訪問してこそ、南の人々たちをより激励することができます。	○	○	○	○
	1	<u>Cách đi</u> , B. sẽ <u>làm công</u> trên một chiếc tàu thủy. <u>移動手段</u> については、私は <u>船の上で労働者</u> になるつもりです。	×	○	○	○
	2	Cùng đi sẽ có hai chú Bảo và Kỳ.	×	○	○	○

		バーオさん、キーさんの二人にも同行してもらおうと思っています。				
	3	Việc này B. tự thu xếp, dễ thôi. これは簡単なことですので、私自身で手配できます。	×	○	○	○
5	1	<u>Lúc đến</u> anh em trông chỉ phụ trách đón <u>ở</u> khi tàu cập bến Miên và đưa B. đến nhà <u>ở</u> anh Sáu, <u>ở</u> anh Bảy. 南についた時、南の兄弟たちはただ <u>で</u> 船着き場で私を迎え、私を <u>を</u> Mr. 6と <u>を</u> Mr. 7の家まで連れて行くことにだけ、責任を負ってもらいます。	×	○	○	○
6	1	<u>Ở</u> lại. 滞在について。	×	○	○	○
	2	Tùy điều kiện mà quyết định: ít là mấy ngày, nhiều nhất cũng chỉ trong <u>một</u> tháng. 条件次第：最低でも数日、最大でも1か月以内。	×	○	○	○
	3	<u>Hoạt động</u> thế nào, sẽ cùng anh em trông bàn định. どのような活動を行うかは、南の人々と話し合います。	×	○	○	○
7	1	Có lẽ Chú và đồng chí khác e rằng sức khoẻ của B. không cho phép B. đi chơi xa. おそらく、あなたと他の同志たちは、私の健康では遠出できないのではないかと心配しているかと思います。	○	○	○	○
	2	Nhưng, thay đổi không khí, hít hấp gió biển và sinh hoạt với quần chúng trong hoàn cảnh chiến đấu sẽ giúp sức khoẻ tiến bộ mau hơn. しかし、環境が変わり、海風を吸い込み、戦場において大衆との活動を行なえば、健康状態も早く回復するでしょう。	○	○	○	○
8	1	<u>Lịch trình đi thăm</u> - cần mười ngày để chuẩn bị. <u>訪問のスケジュール</u> - 準備をするのに10日を要します。	×	○	○	○
9	1	Vượt biển độ 6 ngày. 海路を行くのに約6日。	×	○	○	○
10	1	Từ bến tàu đến địa điểm độ đêm hôm. 船着き場から目的地まで数日。	×	○	○	○
11	1	Vậy nhờ Chú tính ngày cho khớp, một mặt cho B. biết trước để chuẩn bị, một mặt cho anh em trông biết để chờ đón. 一方で私が事前に準備できるように、他方で南の兄弟たちが私のことを出迎えることができるように日数を計算してください。	×	○	○	○
12	1	<u>Đề đảm bảo thật bí mật</u> , Chú chỉ nên bàn việc này với một số ít đồng chí trong B. C. T <sup>3</sup> ).	×	○	○	○

		秘密を守るために、B.C.T {政治局} の極一部の同志とのみこの件を話し合うようにしてください。				
13	1	Mong chờ Chú trả lời. お返事をお待ちしております。	×	○	○	○
教行の間隔			×	×	×	○
14	1	Trước khi đi Rumani, hai đồng chí Côn và Lành có ghé thăm Bắc Kinh và ở lại chơi mấy hôm, rất vui vẻ. 二人の同志コンさんとラインさんが、ルーマニアへの道中、北京に立ち寄り、数日滞在し、楽しい時間を過ごしました。	×	×	×	×
		Sức khỏe của B. không ngừng tiến bộ, càng gần ngày ấm, càng tiến bộ hơn. 私の健康は回復していない訳ではなく、暖かくなるに従って良くなっています。	×	×	×	×
15	1	Chúc chú và tất cả anh em mạnh khỏe. 皆さんのご健康をお祈りします。	×	×	×	×
		Chào thân ái và quyết thắng 敬具、必勝	×	×	×	○
17	1	B.	×	×	×	○
		B				

原典の注

1)	B. có nghĩa là Bác. Bは、おじさん[ホー・チ・ミンのこと]を意味する
	Anh em trong ấy (cách gọi lối miền Nam). 南の兄弟(ベトナム南部での呼び方)。
3)	B.C.T. tức là Bộ Chính trị B.C.T.は政治局の意味

筆者による注

ア ズアンは、レ・ズアンのこと。ホー・チ・ミンは、「d」で表記するところを「z」で表記し、自筆の「ホーの手紙」では、「Duân」が「Zuân」と表記されている。現在のベトナム語では「z」は使用しない。

イ 第三幕開始と書かれているが、何を第一幕、第二幕、第三幕と考えていたのか、この点について仮説を提示することが本論文の主要な目的の一つである。この論点については本論文の第4節で考察を加える。

ウ かつてベトナムからヨーロッパに渡る際に、ホー・チ・ミンは船のなかでコックや船員をしていたことがある。そうしたことを比喩として表現していると考えられる。

エ 当時、ベトナム労働党幹部は、南ベトナムを訪問する際に、海路カンボジアのシハヌークビル港に入り、そこから国境を越えて南ベトナムに入るルートがあったが、そのことを指していると考え<sup>30</sup>。

オ 「南部中央局博物館」の資料によって、これがレ・ドゥック・トであったことが明らかになっている<sup>31</sup>。レ・ドゥック・トの活動については、後述する。

カ 「南部中央局博物館」の資料によって、これがファム・フンであったことが明らかになっている。

<sup>30</sup> 注 28 も参照のこと。また、南ベトナムへの移動・輸送ルートをホーチミンルートと定義するならば、チュオンソン (アンナン) 山脈を通るルートは、狭義のホーチミンルートと呼ぶことができる。最近ベトナムで出版された書籍では、南ベトナムへの移動・輸送ルートとして5つのホーチミンルートに言及している。Đặng Phong, 5 đường mòn Hồ Chí Minh (NXB Tri thức, 2008)を参照のこと。

<sup>31</sup> レ・ドゥック・トの暗号名は、Sáu Mạnhである。Nhớ về anh Lê Đức Thọ (NXB Chính trị quốc gia, 2000)などを参照のこと。

現在、公開されている5つを比較すると、「ホーの手紙」は以下の内容のものであったということが分かる。第一に、テト攻勢第一波と第二波の間に、中国にいるホー・チ・ミンからレ・ズアン宛てに送られたものであるということ。第二に、完全勝利後に、ホー・チ・ミンが南ベトナムを訪問するという計画について、どの程度現実的な話だったのかはともかく、1967年のクリスマスに話し合われていたこと。第三に、手紙のなかで、ホー・チ・ミンは完全勝利を迎えていなくても南ベトナムを訪問する意思を表明していること。レ・ズアンに手紙を出した時期が、「第三幕開始の準備」にとって「適切な時期」と、ホー・チ・ミンが認識していたことである。後述するが、ホー・チ・ミンが「適切な時期」をどのように捉えていたのか、「第三幕」とは何を意味するのかを明らかにすることが重要な鍵になると考えている。第四に、ホー・チ・ミンは、海路南ベトナムに移動する予定であり、このルートが当時一番安全性の高いルートであったと推測されること。第五に、当時南ベトナムにレ・ドゥック・トとフナム・フンが滞在していたこと。特に、後にパリでアメリカの代表団との外交交渉に望む直前に、レ・ドゥック・トが何のために南ベトナムに滞在していたのかも重要な論点である。第六に、ホー・チ・ミンの南ベトナムでの滞在予定は、最低でも数日、最大でも一ヶ月が想定されていた。したがってホー・チ・ミンの南ベトナム訪問中、完全勝利など軍事的大勝利がもたらされるとは考えていなかった可能性があることである。こうした諸点が、現在公開されている「ホーの手紙」から読み取れる内容である。

同時に『略伝』には、もう一つ重要な情報が掲載されている。それは、3月18日にホー・チ・ミンが周恩来首相に、「今現在最も関心があり、最も秘密を要することは、南ベトナムを訪問し、南ベトナムの同胞、戦士達を動員することです」という手紙を出していることである<sup>32</sup>。この点も考慮する必要がある。

## 5 ホー・チ・ミンの手紙の評価

上述したように、ホー・チ・ミンは1968年3月10日の手紙のなかで、「第三幕開始の準備をしている時」を「適切な時期」と捉え、南ベトナム訪問を希望しているが、「第三幕」とは何を意味し、さらに「適切な時期」をどのように評価するかが一つのポイントになる。決定的な証拠となる資料や先行研究が存在しないため、いくつかの仮説を立てながらそれを検討していくことにしたい。

テト攻勢第二波が決定されるのは、4月22日の政治局会議においてであり、4月2日に中国から帰国していたホー・チ・ミンも参加し、実際の攻撃は5月5日午前12時30分に開始された<sup>33</sup>。3月10日付けの「ホーの手紙」の中で「第三幕」と言及されているので、テト攻勢第一波を第一幕、テト攻勢第二派を第二幕と捉えることはできない。仮説を図示したものが図一である。

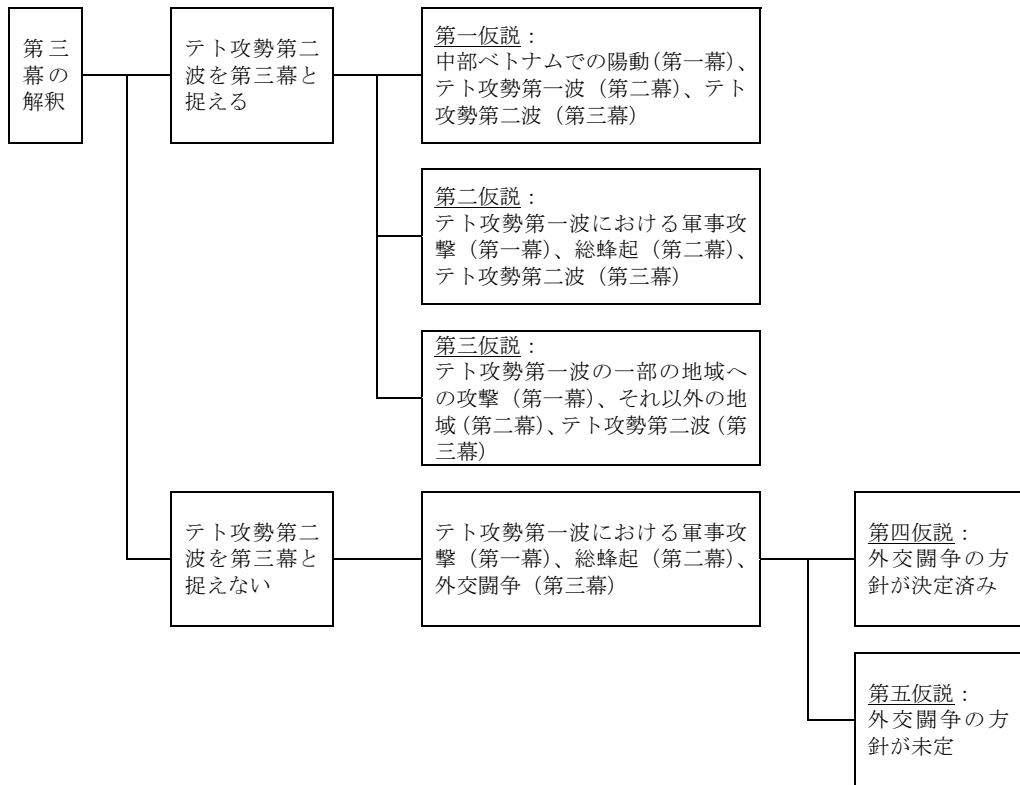
仮説は大きく二つに分けることが可能である。テト攻勢第二波を第三幕と捉えるか、テト攻勢第二波以外のものを第三幕と捉えるかというものである。テト攻勢第二波を第三幕と捉える場合、第一番目の仮説としては、テト攻勢第一波以前に行われたベトナム中部のアメリカ軍基地ケサンなどに対する陽動作戦を第一幕と捉え、テト攻勢第一波を第二幕、テト攻勢第二波を第三幕と捉えるものである。したがって、軍事（第一幕）→軍事（第二

<sup>32</sup> HCMBNTS, p. 159.

<sup>33</sup> *Ibid.*, pp. 167-168.

幕) → 軍事 (第三幕) と、軍事行動一辺倒と考えるものである。第二番目の仮説は、テト攻勢第一波の軍事攻撃を第一幕、南ベトナム人民の総蜂起を第二幕と捉え、テト攻勢第二波を第三幕と捉える。これは軍事 (第一幕) → 政治 (第二幕) → 軍事 (第三幕) となる。第三の仮説としては、テト攻勢第一波のうち、ある一部の都市への攻撃を第一幕と捉え、それ以外の都市への攻撃を第二幕と、テト攻勢第二波を第三幕と考えるものである。これも軍事 (第一幕) → 軍事 (第二幕) → 軍事 (第三幕) と、軍事行動一辺倒と考えるものである。テト攻勢第二波を第三幕と捉えると、「ホーの手紙」のなかの「適切な時期」とは、軍事攻撃を始める直前の時期、軍事攻撃継続の準備をしている南ベトナムを訪問して、南ベトナムの戦士達を鼓舞するというものである。したがって、1967年のクリスマスに、ホー・チ・ミンとレ・ズアンは完全勝利後、ホー・チ・ミンの南ベトナム訪問を計画していた事実に注目し、彼らはテト攻勢が成功するシナリオしか描いていなかったため、テト攻勢第一波に対する評価が主観的なものになり、第二波、第三波と攻撃をくり返し、結果的に失敗したと説明することが可能であり、ブイ・ティンと同じ見解になる。したがって、ホー・チ・ミンが言及した「適切な時期」というのは、南ベトナムにおける完全勝利を目前に控えて、最後の一押しが可能な時期ということになる。同時に、ホー・チ・ミンとレ・ズアンは、軍事攻撃を唯一最大の手段と考えて、外交的な解決についてはほとんど考慮していなかったか、重要視していなかったという評価も導き出すことが可能である。

図1 「ホーの手紙中」中の第三幕の解釈



次にテト攻勢第二波を第三幕と捉えない場合の仮説である。四番目の仮説として、テト攻勢第一波と第一波以前の軍事闘争を第一幕、軍事攻撃に続く政治闘争（民衆の総蜂起）を第二幕、アメリカとの外交交渉（外交闘争）を第三幕と捉える説である。この仮説を唱える場合、ベトナム労働党がどのような外交目標を持っていたのか、持っていなかったのかも重要なポイントになる。四番目の仮説としては、第三幕は外交闘争を意味していると考え、さらにこの時期すでに外交方針が決定していたと考える立場である。五番目の仮説として、四番目の仮説と同じように第三幕は外交交渉を意味しているが、この時期まだ外交方針が決定していなかったと捉える立場である。したがって、「ホーの手紙」のなかにててくる「適切な時期」を、軍事闘争・政治闘争から外交闘争に移る時期と考える。しかし外交闘争の開始は、軍事闘争の停止や緩和を意味しない。むしろ逆である。戦いの舞台が外交交渉の場に移っていくということは、純粋に軍事的な目的のために戦闘が行われるのではなく、国際世論に訴えかけるようなインパクトのある軍事的勝利（たとえば第一次インドシナ戦争時のディエンビエンフーの戦いや、テト攻勢第一波と同程度のもの）を勝ち取る必要があるということであり、より冒険的な軍事行動が取られるということの意味する。それはより大胆な都市部への攻撃、つまりはテト攻勢第二波、第三波へとつながっていったと考えることが可能である。したがって、「適切な時期」というのは、外交交渉を有利に進めるための、象徴的でインパクトのある軍事的勝利のための準備期間にあたりと考えられる。この立場をとると、テト攻勢第二波、第三波によって都市部への無理な攻撃が行われたのも、純粋な軍事的判断によるものではなく、外交で有利な立場を取ることを目指して行われたものであるという評価を導き出すことが可能である。

5つの仮説を提示したが、筆者は「ホーの手紙」に出ている「第三幕」と「適切な時期」の解釈としては、最後の第5番目の仮説が最も適しているのではないかと考えている。筆者は、テト攻勢の第一波が終了した時期（2月）から第二波（5月5日から6月13日まで）の時期に、レ・ドゥック・トが南ベトナムに派遣された事実注目している。レ・ドゥック・トがいつからいつまで、何の目的で南ベトナムに滞在していたかを明示している資料は今のところ確認できていないので、周辺の資料から推測するしかない。1968年に入って、レ・ドゥック・トは、1月16日にハノイから後述する政治局決議文を発表し、2月10日には南部中央局などに秘密電報を送信している<sup>34</sup>。これ以降、レ・ドゥック・トの名前が出された文書は確認できていない。また、レ・ドゥック・トが南ベトナムに入る前に、北京にいるホー・チ・ミンを訪問している<sup>35</sup>。そして、本論文で分析した「ホーの手紙」の内容から、3月10日まではレ・ドゥック・トが南ベトナムに入っていたことが明らかになった。さらに、パリ会談についての資料からレ・ドゥック・トは6月中旬にはアメリカとの交渉のためにパリに到着している<sup>36</sup>。つまり、2月10日から3月10日のうちに南ベトナムに入って、テト攻勢第二波が終了する直前まで、南ベトナムに滞在していたことになる。テト攻勢第二派が終了する直前に南ベトナムを去るという時期的なことを考慮すると、

<sup>34</sup> VDK-29, p.175. 2月10日の秘密電報では、テト攻勢第一波以降、南ベトナムで戦闘に従事している部隊から、党中央やホー・チ・ミンに対して、再度総攻撃をかける決意が多く寄せられていたことがわかる。第二波以前は、南ベトナムの部隊も攻撃に積極的だったことが推測できる。この点もテト攻勢第二波発動の要因の一部であると考えられるが、この点については稿を改めたい。

<sup>35</sup> Duiker, *op. cit.*, p. 558.

<sup>36</sup> Luu Van Loi and Nguyen Anh Vu, *Le Duc Tho – Kissinger Negotiations in Paris* (The Gioi Publishers, Hanoi, 1996) p. 19.

レ・ドゥック・トが単に軍事的な指揮を取るために南ベトナムを訪問していたとは考えにくく、パリ会談についての打ち合わせが行われたと考える方が適当である。

筆者は、1968年1月の第14回中央委員会議で、レ・ドゥック・トが外交交渉の責任者に内定されたのではないかと考えている。この会議以降、1月16日に政治局員のレ・ドゥック・ト名で「党中央国際委員会（Ban công tác Quốc tế của Trung ương Đảng）」の設立についての政治局決議が出されている。グエン・ズイ・チン（Nguyễn Duy Trinh）が委員長、ベトナム民主共和国外交団の代表としてパリ会談に参加したスアン・トゥイ（Xuân Thủy）が常任の副委員長に任命されている。決議文のなかで、党中央国際委員会の任務は対外政策の任務について研究することと明示された<sup>37</sup>。つまり、第13回中央委員会議で三面闘争路線が開始されても、外交交渉については具体的なことは何も決定されておらず、この委員会設立によって外交路線の検討が本格化したと考えることができる。

また、4月2日にホー・チ・ミンは北京からハノイに戻ってきて、4月22日には政治局会議に参加している<sup>38</sup>。この政治局会議によってテト攻勢の第二波を行うことが承認されたが、同時にレ・ドゥック・トをアメリカとの交渉団の顧問として参加させるために、南ベトナムから呼び戻すことも決定された<sup>39</sup>。こうした点から、レ・ドゥック・トの南ベトナム派遣は、外交政策決定のための調査であったと推測できる。アメリカとの直接交渉のために、スアン・トゥイが代表を務めたベトナム民主共和国代表がパリに入るのは、5月9日であった。パリ会談についての資料を見ると、ベトナム民主共和国のパリ会談における当初の目的は、①ベトナム人民の抵抗に対する共感を勝ちとること、②戦闘に有利になるように敵側を分断すること、③北爆の停止であった。③の北爆停止以外、具体的な目標とは言えない<sup>40</sup>。この時点では、まだ準備が整っていなかったことが推測できる。

したがってテト攻勢第一波が開始される直前に外交政策について立案する部署が設立され、外交方針について具体的なことが決定される前にテト攻勢第一波が開始され、テト攻勢第一波の影響を評価し、外交政策を立案するためにレ・ドゥック・トが南ベトナムに派遣されたと考えられる。さらに、外交交渉を有利に進めるための追加の軍事攻撃発動、それも都市部への攻撃継続の必要性についても、南部中央局の指導者（それも極少数）と議論したと考えられる。この時、レ・ドゥック・トがこの考えを伝えた相手は、当時南部中央局書記を務めていたファム・フンと、南ベトナム解放軍司令チャン・ヴァン・チャー（Trần Văn Trà）の二人だったのではないかと、筆者は推測している。このように推測する根拠は、以下の通りである。当時、南ベトナムにはレ・ドゥック・トの実弟のマイ・チー・ト（Mai Chí Thọ）が戦闘に従事していた。彼の回顧録が2001年に出版されているが、テト攻勢に関して、レ・ドゥック・トの南ベトナム訪問、および軍事闘争と外交闘争の関係について言及している箇所は皆無に等しい<sup>41</sup>。テト攻勢を軍事的な側面からしか評価しておらず、その評価は、南北分断以降南ベトナムで戦闘に従事していた指導者らしく、テト攻勢第二波以降の戦闘を行うべきではなかったというものである。この考えは、同様に南ベトナム

<sup>37</sup> VKD-29, p. 161.

<sup>38</sup> HCMBNTS, pp. 167-168.

<sup>39</sup> HCMBNTS, p. 159.

<sup>40</sup> Luu Van Loi and Nguyen Anh Vu, *op.cit.*, p. 16.

<sup>41</sup> レ・ドゥック・トの南ベトナム訪問、もしくは南ベトナムでの活動について言及している資料は、筆者管見のところほとんどない。



で戦闘に従事していたヴォー・ヴァン・キエット (Võ Văn Kiệt) 、チャン・バック・ダン (Trần Bạch Đằng) にも共通していた<sup>42</sup>。しかし、南ベトナム解放軍司令だったチャン・ヴァン・チャーは、この点についてマイ・チー・トラと異なった、以下のような総括を行っている。

南ベトナムにおける戦略の変更〔総攻撃・総蜂起路線への変更-筆者注〕は、アメリカ空軍と海軍による北ベトナム破壊戦争を制限し、1968年3月、つまりはテト攻勢第一波の後、平和交渉を行うことが決定された。しかしサイゴンへの第二波、農村部での第三波攻撃による戦場における激烈な戦闘を経て、11月になってやっとアメリカが北ベトナムへの爆撃と艦砲射撃の完全停止を宣言し、さらに解放戦線がパリ会談に参加することを認めた。こうしたことは簡単に理解できることである。戦争において、特にベトナムが経験したような大きな戦争の場合、政治と外交の展開を決定付ける要素は、戦場における勝敗だということである。戦場において勝利した分だけ、政治的にも勝利を得られるのである。戦場で敗北していながら、政治的に勝利を収めることは決してないのであり、平和を話し合う外交についても戦場における流血と切り離すことはできないのである。1968年末から1969年初頭にかけてパリでの交渉は始まったが、1969年から1970年まで、敵〔アメリカと南ベトナム-筆者注〕は軍事的に優勢に立てると考えていたので、話し合いを引き延ばし、交渉を破棄したいと思っていた。1971年に戦場において私たちが有利になり、1972年に南ベトナムでアメリカとティエウ政権が負けてからやっと、パリ協定を締結したのである<sup>43</sup>。

この考え方は、ベトナム労働党中央の政治局における考え方と極めて似ている。さらに、南ベトナム解放軍司令として、軍事的な指揮をとっていたにも関わらず、同じく南ベトナムで軍事活動に従事していたマイ・チー・トラとは、テト攻勢第二波、第三波に対する評価が全く異なっている。こうした点から、レ・ドゥック・トの南ベトナム訪問中、ファム・フンとチャン・ヴァン・チャーとの間で、テト攻勢第一派以降も外交交渉を有利に進めるためにも、軍事行動継続が必要であるとの認識が共有されたと推定できる。またこの立場をとった場合、ホー・チ・ミンが「ホーの手紙」の中で南ベトナム訪問を希望した「適切な時期」とは、外交闘争のためにインパクトのある勝利をもたらすための戦いの準備をしている時期と捉えることができる。

上記の理由から、筆者は「第三幕」とは軍事闘争・政治闘争から外交闘争へと移る時期をさし、「適切な時期」とは外交交渉を有利に進めるために、よりインパクトのある勝利を収めるための準備をしている時期であると考え。さらに、テト攻勢第二波へと継続されていく原因の一つとして、テト攻勢開始直前まで外交方針が決定していなかったこと、また外交交渉で有利な条件を引き出すためには、国際世論に訴えかけるようなインパクトのある軍事的勝利を演出する必要性があったために、テト攻勢第二波の発動が決定され実行に移されたと推測することが可能である。

<sup>42</sup> Mai Chí Thọ, *Hồi ức Mai Chí Thọ, Theo bước chân lịch sử, tập 2* (NXB Trẻ, 2001) pp. 168-174.

<sup>43</sup> Trần Văn Trà, “Thắng lợi và suy nghĩ về thắng lợi,” *Chung một bóng cờ* (NXB Chính trị quốc gia, 1993) pp. 311-312.

おわりに

本論文では、1968年3月10日に北京にいるホー・チ・ミンからハノイにいるレ・ズアンにだされた手紙の内容分析をすると同時に、その手紙の内容と関連する資料から、なぜテト攻勢第二波が発動されたのかについての分析を行った。その際に、「ホーの手紙」の中で言及されている「第三幕」、「適切な時期」とはどういった意味なのかについての仮説を提示し、検討を行った。

現在、ベトナムにおいて「ホーの手紙」は5つ公開されているので、5つの「ホーの手紙」を比較分析し、内容の確認を行った。「ホーの手紙」の内容については、テト攻勢開始以前の1967年クリスマスに、ホー・チ・ミンとレ・ズアンの間で、完全勝利を勝ち取った後はホー・チ・ミンが南ベトナムを訪問する計画が話し合われていたこと、テト攻勢で完全な勝利がもたらされない状況下でもホー・チ・ミンは南ベトナム訪問の希望を持っていたことなどを紹介した。また、「ホーの手紙」では、「第三幕開始の準備をしている時」が、訪問の「適切な時期」と言及されている。この「第三幕」が何を意味するのか、「適切な時期」とはどのような時期なのかについて、5つの仮説を提示し、それぞれの仮説について検討を加えた。

本稿では、「第三幕」とは、軍事闘争（大都市への攻撃）、政治闘争（民衆の総蜂起）に続く外交闘争を意味していて、外交交渉を有利に導くために、国際世論やアメリカの国内世論に訴えかけるようなインパクトのある軍事行動が企画され、それがテト攻勢第二波発動につながったのではないかという推論を立てた。この推論を証明するために、当時のレ・ドゥック・トの動きに焦点をあてて分析を試みた。種々の資料から、レ・ドゥック・トの南ベトナム派遣は単なる軍事行動の計画立案、実行、評価ではなく、外交交渉の打ち合わせと、外交交渉を有利に進めるために追加的な軍事行動の必要性の説得にあったのではないかという推論を導き出した。

付記

本研究は、平成22年度科学研究費補助金（若手研究（B） 課題番号50386562）の助成による研究成果の一部である